様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４０１９

研究課題名（和文）アジア近現代演劇の動態論的国際共同研究

研究課題名（英文）Collborative Dynamic Research on Asian Contemporary theatres and Performances

研究代表者
永田　靖（NAGATA, YASUSHI）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：８０２６９９６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、4年間で7回の共同研究会を開催、4回の大学院生を主発表者とする国際学会を開催した。これらの研究会、国際会議では、アジア演劇のアイデンティティの問題を、日本、韓国、台湾、中国、シンガポール、インドなどの事例を適宜検討しつつ、およそ戦前から戦後にかけていかに揺れ動いてきたかを明らかにした。またアジア間の流動性の問題を検討し、およそ第2次世界大戦前から戦後にかけて独立していく過程の中で近代化が成し遂げられて行く様相を明らかにした。その越境性にも地域性がありその差異を前提にしつつ、アジア近現代演劇は互いの反撥と調停を繰り返しながら、今日に至っていることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：This research project held seven colloborative research meetings and hour international theatre studies conference in some Asian cities; Osaka, Seoul, Taipei, Shanghai, Singapore and Jaipur. Members discussed on Asian theatre identity picking up each topics of these regions, and explored these identities have been unstable and constantly changed before and after World War Ⅱ. And also members researched dynamic trans-nationality and trans-regionality on theatres and performances. The research project explored aspects of the process of Asian modernization and its influence to contemporary Asian theatres. Although the process often differed from region to region, Asian modern and contemporary theatres have included and represented their repeated controversies and reconciliation.

研究分野：演劇学

キーワード：アジア演劇　演劇史記述　ポストコロニアル　パフォーマンス　越境性　モダン・ドラマ　伝統演劇　近代化

１．研究開始当初の背景

本研究は 2008 年度に創設した国際的な研究グループ Asian Theatre Working Group の共同研究と連携して進めるものである。これは演劇研究の国際的学会である International Federation for Theatre Studies(IFTR、国際演劇学会)の傘下で組織した共同研究のグループで、本研究代表者永田靖がその創設から代表を務めている。アジアの演劇を研究する時に、西欧演劇との比較対照ばかりではなく、アジア域内での演劇間の関係や接触を検討する共同研究である。現在、世界 15 カ国ほどから 90 名前後の研究者がメンバーとなっている。

この Working Group は 2008 年 7 月 17 日にソウル（中央大学校）において予備的な会合を持ち、2009 年 7 月にリスボン大学において第 1 回目の研究会を開催した。この研究会の実績を踏まえて、2010 年度からは科学研究費補助金「アジアにおける近現代演劇の国際的比較共同研究」を獲得し、毎年 2 回の国際研究集会を開催してきた。クアラルンプール（マレーシア大学、2010 年 3 月 17 日）、ミュンヘン（ミュンヘン大学、2010 年 7 月 26 日）、大阪（大阪大学、2011 年 2 月 27 日、8 月 9 日）、台北（国立台北藝術大学、2012 年 1 月 7 日～8 日）、サンチアゴ（ポンティフィリシアカトリック大学、2012 年 7 月 23 日）、北京（国立中央戯劇学院、2013 年 3 月 16 日～17 日）、バルセロナ（国立演劇大学、2013 年 7 月 22 日）、大阪（大阪大学、3 月 15 日～16 日）と開催してきた。

これらの一連の研究会では、およそ 19 世紀末～現代のアジア諸国の演劇の作品分析はもとより、制度や検閲、劇場や演劇の社会的機能などの様々な問題を扱った。他方で、当初想定していたアジア間の相互影響の様相やアジア演劇の共通する芸術的特徴などについては、種々に議論は続けたものの、本格的な検討は今後の課題として残った。近代国家の枠組みでは、20 世紀前半まではともかく、独立を果たし経済的にも急成長を遂げた 20 世紀後半の問題は扱い切れない点も指摘された。このような反省を踏まえて今回の共同研究は、20 世紀後半を主たる対象にして、人種、民族、言語などの枠組みで考察することにする。アジア域内では相互に移住、移民、亡命が繰り返されており、いまだに多くの人口移動が認められる。また香港やシンガポールなどコスモポリタン的で多民族的な都市が成立しており、多言語演劇上演が常態化している。これらのアジア演劇の特徴を演劇学・演劇史的観点から再検討を行いたい。

２．研究の目的

グローバリゼーションの進行する中で演劇学・演劇史の在り方を再考することは依然として急務の課題である。近年は徐々にアジア演劇に対する関心も高まってきているとはいうものの、相変わらず演劇学・演劇史の在り方は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されていることがいまだ多いと言わざるをえない。アジア演劇の固有の価値や広い意味での美学を西欧的演劇研究に反映し、演劇学研究をよりグローバルなものにしていくことが求められている。それは個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワーク構築を進めながら行う比較共同研究がより今もって効果的である。個々の研究は優れた成果を上げ始めているアジアの研究者間の、世界演劇史的視野に立った比較共同研究によってアジアにおける近現代演劇の特徴とアジア性を見出すのが目的である。

３．研究の方法

本研究では、①アジアの近現代演劇相互の影響関係の研究　②演劇史における「アジア性」（美学、訓練方法、社会的機能、批評言語）の検討を行う。そのため研究活動は次の５つの柱を持つ。先行研究の検討と問題点の明確化、個別のアジア演劇研究を基にした定例研究会の開催、国際研究集会・シンポジウムの開催とアジアの演劇研究者のネットワークの構築、学生・大学院生交流ワークショップの開催、『アジア演劇論集』の編集・刊行である。以下簡単に記載しておく。

まず、先行研究の検討と問題点の明確化については、開催するそれぞれの研究会において、現在の英語圏におけるアジア演劇記述とアジア各国内の演劇研究の現状を相互に参照してその差異や問題点を浮き彫りにしていく。研究分担者を中心にそれぞれ分担した領域での先行研究の洗い直しを行い、定例研究会で議論して、問題点の把握に努める。アジアの側からの演劇史記述の方法論を検討する。これらの研究成果についての議論を行い、英語による論文集の刊行を行う。

次に定例研究会の開催については、海外での国際研究集会を年間 2 回開催していく。一回は IFTR 国際演劇学会大会開催時に、研究会を開催する。もう一回はアジアの諸都市において研究会を開催する。国内における定例研究会は、研究代表者永田靖が代表を務める日本演劇学会分科会近現代演劇研究会と適宜連携し、主として大阪大学で開催する。年間 5 回の開催予定とする。適宜、アジア各国より研究者を招聘して研究報告と議論を行う。アジアの演劇研究の学科や専攻を持つ主要大学と連携ネットワークを構築していく。国立韓国藝術綜合学校演劇院、国立台北藝術大学戯劇系、国立マニラ大学、国立上海戯劇学院などとの連携を進めていく。また大学院生交流プログラムを実施する。

４．研究成果

2014 年度から 2017 年度の４年間で毎年２回の国際研究集会を開催した。2014 年 7 月ウォーリク大学、2015 年 7 月ハイデラバード大学、2016 年 5 月シンガポール南洋理工大学、

2016 年 6 月ストックホルム大学、2017 年 2 月マニパル大学（インド、ジャイプール）、2017 年 7 月サンパウロ大学、2018 年 2 月マニラ大学と 7 回の国際研究会を開催した。各回、世界各国からアジア演劇研究者が 15 名～30 名ほど集まり、極めて濃密な議論を行い、それぞれの地域での演劇状況を認識し意見を交換すると共に、近代化、身体、ジェンダー、移動性と言った観点でアジア演劇の特殊性を浮き彫りにすることができた。とりわけ2017年2月にフィリピンのマニラ大学で開催した国際会議は、通常の研究会の規模ではなく、国際演劇学会の地方大会として位置づけたもので研究発表 60 本ほど、参加者は 100 名を超えていた。テーマは Bodies in/and Asian Theatres という身体に絞ったもので、アジアの身体の演劇やパフォーマンスにおけるあり方の特殊性や歴史性が議論され、充実したものとなった。

また、2014 年 11 月国立韓国芸術大学、2015 年 11 月上海戯劇学院、2016 年大阪大学、2017 年 11 月国立韓国芸術綜合学校演劇院と、アジアの演劇学を専攻する大学院生の研究発表と交流を主眼とする International Asian Theatre Studies Conference 国際演劇学会議を、ソウル、上海、大阪と毎年開催した。これらは大阪大学、韓国芸術綜合学校演劇院、上海戯劇学院、国立臺北藝術大学戯劇系の大学院生がそれぞれ３～６名、各回およそ 20 名ほどの大学院生と数名ずつの教員が集い、特定のテーマで開催する会議である。取り上げたテーマは、演劇研究の新思考、アジアの演劇性、アジアのアイデンティティなどを取り上げて、大学院生の研究発表に加えて、教員も発表し、互いに質疑をすることでそれぞれの大学院での研究方法や主たる関心の微妙な差異や共通点を理解しあい、大学院生間の研究上の交流が格段に進んだ。

海外からの大阪大学への演劇研究者の招へいも活発に行われた。この 4 年間でジョン・ジャノン准教授（ニューヨーク市立大学）、エステラ・ゼロムスカ教授（アダム・ミツケヴィチ大学、ポーランド）、王冬蘭教授（帝塚山大学）、張偉品准教授（上海戯劇学院）、ジェシカ・ヤン教授（香港バプティスト大学）などの研究者を２ヶ月～１年の長短期にわたって招へいし、大阪大学での共同研究に参加した。

今回の共同研究は、アジア演劇を広く見て、その相互の影響関係や演劇の流動性がもたらす動態性に着目して考察するものである。これらの議論の個々の論点については個別の論文を参照頂くこととして、共同研究として改めて認識した大きな論点を記載しておく。第１には、アジアの地域間の演劇交流はいかに活発化しても、演劇文化や演劇の伝統にはそれぞれの地域で微細な差異が存在していることに留意していなくてはならない。「日本演劇」と一言でいうが、現実にはそのような「単一の日本演劇」は存在せず、日本において主として日本語よって上演される無数の演劇の集合が日本演劇である。そのようなものとしてアジアの諸地域の演劇を考えるべきである。第２には、今日の演劇交流の活発化は政治的国境の枠組みを一旦は取り払うことを提案しているように思われるが、それは現代において初めて生じたことではない。我々の主たる研究対象であった 20 世紀初頭から今日まであり方は異なるものの、それぞれの時代で演劇の越境性や相互関係は認められる。問題とすべきなのは、その越境性や相互関係を生み出している土台にあるものや誰のための越境性かという観点を含んで演劇を考察すべきことである。演劇の純粋に技術的美学的な議論だけでは近現代の演劇の、とりわけ西欧との関係での議論は十全には尽くせない。例えば、日本と韓国の２００２年の共同制作で、平田オリザと金明和の作品『あの河を超えて　五月』はこのコンテキストではもっとも成功したものの一つである。作品は、韓国の日本人家族と韓国人家族のひとときのふれあいを描いていくが、その中で両国の過去と歴史がそれぞれの彼らの心象と重ね合わされていく。この作品は日本語と韓国語のバイリンガルでの公演であり、地理上の国境を超えて存在している作品に見える。しかしこの越境性は、シンガポールの演出家オン・ケンセンが、日本の劇作家岸田理生の作品を演出した『リア』の越境性とは異なっている。作品の演劇的特徴はもとより、シンガポールの標榜する汎アジア的な越境性と、日韓両国の越境性とは同じものではない。特定の国家の枠組みを離れてアジア域内の演劇の新しい演劇史学や分析の方法論を探求する際に、演劇そのものだけではなく、その文脈も同時に含む論点が求められている。そしてその上で、第３には今後のアジア演劇研究では、域内での活発化する人的交流のネットワークにもっと焦点を合わせるべきであろう。このネットワークは、亡命、移住、留学、商行為、旅行など様々な交流によって形成されているが、これらのネットワークのあり方に注目することで、伝統的な政治地理的な枠組みから解放された新しい演劇学研究の姿が見えてくるのではないだろうか。

これらの多くの研究会や会議を通して、様々な研究報告がなされた。それらは各自それぞれで学術雑誌などへ寄稿した。またこの間の成果を論文集として刊行予定である。一つはアジア演劇の近代化の問題をまとめたもので、Modernization of Asian Theatres として Rawat Publication から 2018 年 7 月には刊行予定となっている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　13　件）

永田靖「演劇は教養になるか」『演劇学論集』紀要 65、日本演劇学会、2017、pp.21-30

永田靖「アジアの近代劇化：森本薫『大川仇討』（1941）について」『Arts and Media』Vol.7, 大阪大学文学研究科アート・メディア論コース、2017 年 pp.300-3004

瀬戸宏、「宮本研『阿 Q 外伝』考」『近現代演劇研究』７号、日本演劇学会分科会近現代演劇研究会、2018　pp.2-12

Mitsuya Mori, "Ibsen's An Enemy of the People: An Inter-sociocultural Perspective", *Scandinavica*, Vol. 56, No.2, 2017, Department of Scandinavian Studies, UCL, pp.26-56.

中尾薫「野口米次郎が再発見した能—その出会いと傾倒の時期をめぐって—」『古典演劇研究の対象と視点』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター東アジア古典演劇研究会、pp81-98、2018 年 1 月

永田靖「「伝統」の舞踊化（二）–雲門舞集七〇年代作品『白蛇傳』『薪傳』を中心に」『演劇学論叢』大阪大学文学研究科演劇学研究室、2017 年 3 月、pp.1-19

瀬戸宏「中国国家話劇院『リチャード三世』（2102）をめぐって」『摂大人文科学』24 号 2017, pp.31-44

Masae Suzuki, "Shinsaku-Noh Othello", Shakespeare Studies Volume 53, The Shakespeare Society of Japan, 2016 年 3 月、pp.79-82

永田靖「伝統」の舞踊化–林文中舞踊団『小南管』シリーズをめぐって」『演劇学論叢　第 14 号』大阪大学文学研究科演劇学研究室、2015 年 3 月 pp.59-78

中尾薫「演劇学研究室蔵『森本薫関係資料』」目録」『演劇学論叢』14 号、2015 年 pp.165-183

Mitsuya Mori, "The Structure of the Interpersonal Relationship in Ibsen's *Little Eyolf*: A Japanese Perspective", *Ibsen Studies*, Vol. 15/ Issue 2, The Centre for Ibsen Studies, December 2015.

毛利三彌「東アジア演劇の伝統と西洋受容」、『演劇学論集』日本演劇学会紀要 59、2014, 90-105

瀬戸宏「試論春柳社在中国戯劇史上的位置－兼談中国話劇開端是否為春柳社」（《戯劇芸術》2014 年 3 期 pp.57-64 上海戯劇学院

〔学会発表〕（計　20　件）

Yasushi Nagata, "Traditional Asian Performing Bodies in a Post-Globalized Era," Chair and Moderator, IFTR Manila Conference, '*Bodies in/and Asian Theatre*', 2018, 21 Feb., 2018, Asian Center, University of the Philippines, Diliman,

Yasushi Nagata, "Trans-Geographical Trials of the Jokyo Gekijo Theatre Company: on *The Bengal Tiger," Unstable Geographies, Multiple Theatricalities,* IFTR Sao Paulo Conference, Sao Paulo University, Brasil, 14 July, 2017

Yasushi Nagata, "The form and Content of Theatre in Asia through travel and displacement", *TRAVEL and DISPLACEMENT in/with ASIAN THEATRE*, IFTR Asian Theatre WG Jaipur Colloquium, Manipa; University, Jaipur, India, 19, Feb., 2017

Mitsuya Mori, "Some Examples of Theater Displacements in Asia: A Duologue with Yasushi Nagata", IFTR Asian Theatre Working Group Colloquium, Jaipur, India, February 2017.

瀬戸宏「文明戯研究的幾個問題–以文明戯和早期話劇」話劇的関係為中心（第四届清末民初新潮演劇国際学術研討会・主報告 2017.11.9 中国上海・上海賓館）招待発表

中尾薫「明治・大正期の京都京都における素謡の場」第29回能楽フォーラム「近代の演能空間①—能楽堂の時代—」、灘高等学校、2017年12月23日

Yasushi Nagata,"Destabilizing Geography: on Kara Gumi's Taiwan Production in 1992", The 4th International Asian Theatre Studies Conference; Asian Theatricality and Identity. Nakanoshima Center, Osaka University, 4 November, 2016

Yasushi Nagata, "Performing Asian Geographical Past: on Production of Binro no Fuin by Karagumi, 1992", IFTR Stockholm Conference, Presenting Theatrical Past, Stockholm University, 16 June, 2016

Yasushi Nagata, "The Modern Perception of the Traditional Theatre in Japan: a Theoretical Perspective", Asian Theatre Working Group Singapore Colloquium, National Institute of Education, Nanyang Technoligical University, 30 April & 1 May, 2016

Mitsuya Mori,"The Modern Perception of the Traditional Theatre in Japan: A Theoretical Perspective", IFTR Asian Theatre Working Group Colloquium, Singapore, April 2016.

Masae Suzuki, "Shakespeare, Noh, Kumiodori and Ryukyu Opera: Recreating Shakespeare in classical Japanese and Okinawan theatre"The World Shakespeare Congress, Edward VI School, Stratford-Upon-Avon, Warwickshire, 2 Aug, 2016

Kaoru Nakao, The Concept of Mugen-Noh in Contemporary Japanese Shakespeare Productions With Special Reference to Its Influence on Makoto Sato's "Lear", Shakespeare Center, The World Shakespeare Congress, 2 Aug, 2016.

Yasushi Nagata, "Geography of Inter-Asian Theatre; Towards a New Perspective of Asian Theatres", *Theatre and Democracy*, IFTR Hyderabad Conference, 6 July, 2015

Mitsuya Mori, "The death of *shingeki* (new drama, or a new art theater) in Japan", IFTR conference, Hyderabad, India, July 2015.

Masae Suzuki, "Democracy in Okinawan Shakespeare" *Theatre and Democracy*, IFTR Hyderabad Conference, 7 July, 2015

Yasushi Nagata, "Acceptance of Constantin Stanislavsky in Japan", *Theatre and Stratification*, IFTR Congress 2014, Warwick University, 29 Jul. 2014

Mitsuya Mori, "Some problematic aspects of the early *shingeki* (new drama) in Japan", Annual Conference of the International Federation for Theatre Research at Warwick University, UK, 28 Jul. 2014

Masae Suzuki "The Stratifications of the Okinawan Versions of *A Midsummer Night's Dream* - from rituals to theatre and film"-, *Theatre and Stratification*, IFTR Congress 2014, Warwick University, 29 Jul. 2014

Mike Ingham & Kaoru Nakao"Come, you spirits": An Alternative Afterlife to Shakespeare's Macbeth as Perceived through Japanese Classical Noh Theatre, The 12th Biennial International Conference of the Australian and New Zealand Shakespeare Association, University of southern Queensland,4 Oct. 2014

中尾薫「物着」の身体—人格変化の演技法からみる能の演劇性—」、 Théâtralité(s) Orient–Occident、**ストラスブール大学** 2014 **年** 10 **月** 17 **日**

〔図書〕（計　8　件）

Yasushi Nagata & Ravi Chatruvedi (eds.), *Modernization of Asian Theatres,* Rawat Publication, 2018, July (Coming soon)

Yasushi Nagata, "Crossing the Sea: The Theatre Company Ishinha's Geographical Trial" *Trans Naitonal Performance, Identity and Mobility in Asia,* Iris H. Tuan and other (eds.), Palgrabe, 2018

永田靖、上田洋子、内田健介編著『歌舞伎と革命ロシア』編著、森話社、2017、pp.1-387

瀬戸宏『中国のシェイクスピア』松本工房 2016、pp.1-320

Jonah Salz(ed.)、Masae Suzuki and 58 others., *A History of Japanese Theatre,* Cambridge University Press, **2016** pp.150-154

泉紀子編、鈴木雅恵、中尾薫　他著『新作能マクベス』和泉書院 2015 年 10 月、p.27, pp.64-73　pp.138-161 **他**

瀬戸宏『中国話劇成立史研究』陳凌虹訳、厦門大学出版社 2015、pp.1-402

中尾薫「田安宗武の改訂案書付—『翁・父尉延命冠者』と『二曲三体砕動考』をめぐって—」pp181-204／「加藤枝直」「烏駕籠」「観世元章」「国学」「古事記詳説」「田安宗武」「藤林権左衛門」「目玉観世」「元章好み」pp379-422／「元章年譜と研究資料目録」pp454-532）／松岡心平編『観世元章の世界』檜書店、2014 年 7 月

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
永田靖（Nagata Yasushi）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：80269969

(2)研究分担者
毛利三彌（Mori Mitsuya）
成城大学・その他・名誉教授
研究者番号：10054503

瀬戸宏（Seto Hiroshi）
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：80107864

鈴木雅恵（Suzuki Masae）
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：70268291

中尾薫（Nakao Kaoru）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：30546247

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）